

学芸員が学び集う場を

提言

数年前、学芸員同士が集まった座談会の中で「学芸員は孤独だ」という話題が出ました。なぜ孤独かということ、県内のミュージアムは小規模館が多く、学芸員が施設に1人しか配置されていないことが珍しくありません。そのため、小規模館の学芸員は展示方法、照明の当て方、展示環境や作品保存の知識など、ほとんどが独学という場合があります。



酒田市美術館主任学芸員

こ ち 子
はる 治
う ち 武 内

他館の学芸員と話をしていくうちに、一つの文化施設内で課題を抱えがちですが、小規模館の悩みは他の文化施設でも同じ悩みを持っているケースが多いことに気がきました。そして、自分が勤務している文化施設の問題だけを考えるのではなく、庄内全域、県内全体の文化施設を広域に見つめ、同じ問題を共有し解決していく仕組みがつかれないかと考えました。

そこで、私が勤務する酒田市美術館が主催となり、2019年度より一般財団法人地域創造の助成を利用した「公立美術館地域展開型研修事業（オーダーメイド）型ゼミ」を開催しています。この事業では、主催する文化施設がマ

ネージメントに関する研修内容、講師を自由に設定できます。

私がオーダーメイド型ゼミの研修で意識したことは、「小規模館でも研修後すぐに実践できる現実的な研修内容であること」と、「文化施設で働く職員たちが悩みを共有し、気軽に相談できる環境をつくる」ことでした。

そのため、事前に庄内地域の文化施設にアンケートを行い、どのような研修をしたいか、参加しやすい時期はいつなのかなど、他の学芸員の意見を聞きながら文化施設の職員が参加しやすい研修を目指しました。また、県内の文化施設では学芸員の業務を他の職員も担っている場合がある

ため、学芸員以外の職員も参加対象としました。

現在まで5回の研修を開催しましたが、特に好評を博した研修は、「アフターコロナの集客方法／集客できるチラシ、SNS（交流サイト）の活用方法」です。小規模館では

デザイナーにチラシ・ポスターを依頼することなく、学芸員が独自で作成している場合があります。そこで、各館のチラシを持ちよってお互いのチラシの良い点、改善点を話し合いました。

参加者からは、「普段1人でチラシを作成しているため、特に他の職員から指摘を受けることもありませんでしたが、他館の方から貴重な意見をいただくことができ、大変勉強になりました」、「日頃1人で考えていたこと、もやもやしていたことを皆と共有でき、具体的なアドバイスをいただくことができ大変参

考になりました」などの感想が寄せられました。また、拡散されやすい、目に留まりやすいSNSの活用方法を研修したことによって、研修後にツイッター（現X）や「note」などを早速始めた館もありました。

残念ながら本年度で地域創造の助成は最終年度となりま

す。今後も、県内の学芸員や文化施設の職員が同じ悩みを共有し、学び集える場をつくる必要があります。県内のミュージアムが活発になるには、まずそこで働く中の人たちが生き生きと働ける環境をつくるのが大切です。1人の悩みを皆の悩みとして共有し、課題解決に向けて気軽に相談し合う環境が構築できれば、県内全体の文化施設がこれまで以上に活発になり、芸術・文化の活性化につながるかと期待しています。

（酒田市在住）

文化施設活性化へ ■ 相談し合う環境構築が必要